「現代の肖像」斉加尚代

ジャーナリスト・ドキュメンタリー監督の斉加尚代さんに注目が集まる。『AERA』3月 27 日号から、大阪のメディアの現実を中心に、抜粋して紹介する。写真は大阪市初のユネスコスクールだったが、統廃合された旧御幸森小学校で。

理不尽な誹謗やバッシングがおこるたび、斉加尚代は丁寧な調査報道でその答えをきっちりと示してきた。数々の賞を受賞した映画「教育と愛国」では、教育現場や真理を追究すべき学問が政治に浸食されていく危機を描く。これは「いま」の話である。メディアの役割として「分断された世界をつなぎ直す」ために、斉加は作品を通じて警鐘を鳴らす。

2012 年 5 月 8 日。この日、斉加は大阪市長(当時)の橋下徹との囲み取材に臨んでいた。橋下の友人で民間校長として採用されていた人物が卒業式で教師が君が代を歌っているか、口元をチェックしていた。この振る舞いを「素晴らしいマネージメント」と発言した橋下に、斉加は真意を質した。ところが、橋下は逆質問をし続け、不勉強、とんちんかん、という罵倒を斉加に浴びせ続けた。ネット上に記者の名前が投稿でさらされた途端、いっせいに斉加に対するバッシングが始まった。社の代表電話から斉加に「日本から出て行け」と怒鳴る者まで現れた。ショックであったのは、この件は同業者たちもまた本質を捉えずに非は記者側にあるとしたことだった。面罵事件の少し後、MBS で報道局員を集めてのニュースセンター会が開かれた。局員から、「質問が長すぎた」「首長を怒らせたのは良くない」と意見が表出し、センター長(当時)の澤田隆三によれば、「あまりに否定的な意見が多くて驚きました」。

当時の MBS の報道局長であった泉俊行は、現場の判断にゆだねていたが、今、あらためてこの囲み取材の映像を見てこう語った。「記者ならば、突っ込まなければいけない市長の詭弁と暴言がいくつかあった。例えば『首長と記者は対等だから、まずこちらの質問に答えないと話さない』という発言。人間は対等ですが、首長と記者は非対象の関係で記者の役割は権力のチェックなのでこれは違いますね」

なぜ、あの場所にいた記者たちは、これらの市長の発言を「今のはどういうことですか?」と質さずに看過してしまったのか。泉は続ける。「橋下さんは、すでに各局のバラエティーに出ていたし、注目されている人気の政治家でしたから。あれはテレビ的にも派手でキャッチーな映像で、好奇心をあおる人がいたかもしれない。今、見返すと斉加は質問する上で敬語を使いひとつして事実を曲げていないし質問はブレてもいない」

製作局はすでに視聴率の取れる政治家をタレント扱いしていた。……

(2023 年 3 月 30 日)